

デジタル博物館事業の戦前集落復元について

工藤 紗也香

はじめに

豊見城市教育委員会文化課(以下、文化課)では、令和 2 年度から沖縄振興特別推進市町村交付金(一括交付金)を活用し、デジタル博物館事業¹を実施している。その中の一つに、歴史デジタルマップ・文化財 3D 作成業務の一部として戦前集落の 3D 復元作業を行っている。

令和 4 年度からは戦前集落についての聞き取り調査を行い、戦前からの集落 23 字のうち 6 字、当時の豊見城村にあった国民学校 2 校の聞き取り調査を終えた²。令和 7 年度で事業開始から 4 年が経過し、折り返し地点に差し掛かった。

そのため、本稿では本調査の概要や調査方法などを振り返り、今後の課題を再考することを目的とする。

1、デジタル博物館事業の概要

デジタル博物館事業は、令和 2 年度から 11 年度までの事業期間を計画している。文化課で収集・所蔵している膨大な資料を整理・デジタル化し、「とみぐすくデジタルアーカイブ」として公開することによって、いつでも誰でも、どこでも豊見城の歴史や文化などの魅力に触れることが出来る。多くの資料を公開し、教育現場や観光、産業の場でも活用することで、豊見城市の魅力の発信や、地域振興につなげることを目的とする。

令和 2 年度・3 年度のおもな業務内容は、文化課で所蔵する博物館資料や地域資料のデジタル化、23 字の地域写真集の作成と発刊、民話音声公開資料作成、委託事業者による企画提案業務などである。

令和 4 年度からは新たに、戦前の集落 3D 復元も加わった。沖縄戦以前の風景はもちろん、各地域の写真についてもほとんどなく、戦前の集落風景や日常生活などは、戦前生まれの方々の記憶にしか残っていない。そこで、戦前生まれの方々にお話しを聞き、3D 復元におとしこんだ。これを使って戦前の生活を知ること、沖縄戦で失われた日常生活や風景を知ることができる。どの世代にも、戦前から現在までの歴史を知ってもらうことで、世代間のコミュニケーションを図ることができ、地域への愛着も増すことが期待できる。

また、戦前から戦後までの豊見城村の経過をデジタルマップで再現し、平和教育などにつなげるねらいもある。今年度は、デジタルマップも反映された沖縄戦平和学習用 VR コンテンツ「時空記者」³を学校側に提供し、平和学習の時間に利用してもらうことができた。

2、調査前から調査後の流れ

2-1 調査前

調査地域の景観や家屋の外観、そして調査地域の歴史や祭祀などを知るために、空中写真や古写真、文献文化課所蔵資料などを確認する。空中写真は、沖縄県公文書館で収集したものや、国土地理院のウェブサイトから入手したもの、米国国立公文書館所蔵の空中写真を確認する。また、古写真は文化課の所蔵資料を確認する。文献は、文化課の刊行物である『豊見城村史 第 6 巻 戦争編』⁴(以下、戦争編)と『豊見城市史 第 2 巻 民俗編』⁵(以下、民俗編)、そしてこの 2 冊を刊行する際の収集資料や調査資料である。また、文化課へ寄贈していただいた個人の戦争体験記や字誌などの自治会資料、広報紙、新聞なども活用した。

調査が始まる前に、対象地域の屋号地図や空中写真などの基礎的なデータを委託事業者に提出する。屋号

に番号を振り、集落全体の戸数を明らかにする。その後、調査が進むにつれて番号ごとに調査内容をまとめ委託事業者へデータを提出していく。

屋号地図は『民俗編』に直近の調査内容が反映されているが、この調査も約 20 年前に実施されており、今回の調査の話者と異なる場合が多い。

そのため、本調査の初回は『民俗編』の屋号地図を確認する。その後、屋号の確認、家屋の位置、空き家の有無、敷地内に同居する別家庭がいなかったかなど調査地の全戸数を明らかにし、最新の情報が反映された屋号地図を作成する。

2-2 調査

自治会や話者への挨拶を終えると、調査が始まる。調査場所は公民館を使用することもあるため、調査概要の説明、場所の提供などの相談を自治会長や役員に行う。場合によっては話者のご自宅でも調査を行うため、ご家族が同居されている場合は、そのご家族にも了承を得てから調査に入る。

文化課で行う調査は、聞き取り調査と現地調査の 2 つである。

聞き取り調査では、調査地域全戸数の詳細と集落景観について調査する。また、集落内の出来事や、戦前の日常生活、戦中の集落内の変化などのエピソードも収集する。話者の幼少期や戦前の日常生活を成果物に取り入れることで、親近感が増し、戦前集落や話者が過ごしていた時代を理解しやすくなる。

【写真 1】は令和 7 年度の調査地域にて、話者と自治会長へ調査前の説明をしているところである。空中写真や、戦前の屋号地図を見ながら、集落内の調査対象エリアを確認し、屋号や戸数の確認をしている。

現地調査では、調査対象の家屋(前述の屋号地図に掲載されている家屋)を中心に、集落内の水路やサーターの跡地、住民がよく使っていた道路の確認をする。現在建てられている家屋も、屋敷囲いの一部に戦前の石垣が使われていたり、ヒンプンがそのまま残っていたりする場合もあるので、戦前から現存している可能性のあるものを記録しておき、調査時に話者へ確認する。

聞き取り調査の際には、以下の【図 1】質問項目一覧表をもとに、家屋情報を集める。『戦争編』や『民俗編』の調査時にも家屋調査は行ったが、間取りや屋敷囲い、ヒンプンの有無などの詳細は調査しなかった。当時の調査内容は、集落内の屋号と戸数、瓦屋根の家屋の数や該当する家屋の屋号、公民館の外観、商店の有無や詳細、製糖場の数やクムイ(池)、共同の井戸などについてである。

そのため、本事業の調査では戦前集落の復元を目指しているため、出来る限り一軒一軒の詳細な情報を聞き出している。

前述にもあるように、刊行物 2 冊の調査時の話者と、本事業の話者は異なる場合が多いため、まずは屋号や戸数の確認から入る。

その後、話者が住んでいた家屋の詳細、親類、近所の家屋などと調査範囲を広げていき、全軒の聞き取りをする。



【写真 1】自治会挨拶

景観情報は、屋号地図や現地調査時に撮影した集落内の写真を見ていただき、戦前の景観を聞いたり、話者と一緒に集落内を歩いて教えていただいたりすることもある。その際には、自身が住んでいた屋敷跡にも行き、家屋情報を確認することもある。

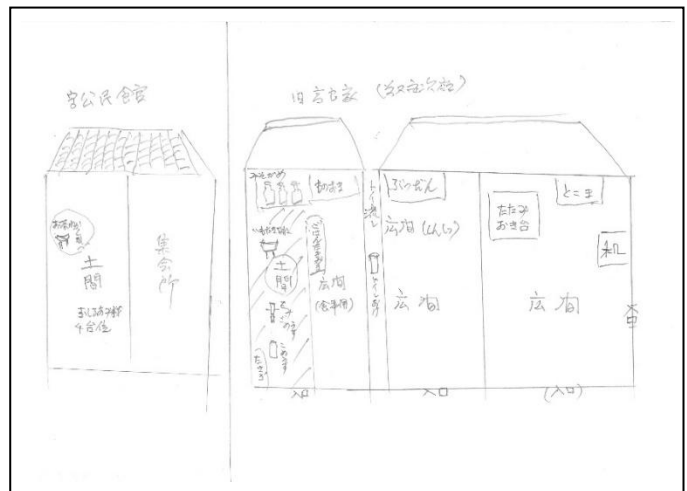
確認	調査項目	詳細	備考
<input type="checkbox"/>	(1) 門・出入口	位置	
		幅	
<input type="checkbox"/>	(2) 主家・台所	1つ/別棟	
		向き	
<input type="checkbox"/>	(3) 屋敷囲い	種類 (屋敷林のみ/石垣/チニブ/竹)	
		木の種類 (名前/実/花)	
<input type="checkbox"/>		高さ	
<input type="checkbox"/>		位置 (石垣の内/外/石垣の上)	
<input type="checkbox"/>		範囲	
<input type="checkbox"/>	(4) 屋敷内の建物など	種類 (主屋/台所/ヒンブン/門扉/家畜小屋/フール/アシャギ/アタイ/水タンク/風呂/高倉)	
<input type="checkbox"/>	主屋外部	位置 (門から見た位置)	
<input type="checkbox"/>		屋根の形状 (切妻型/入母屋型/方形型)	
<input type="checkbox"/>		屋根の材質 (カヤブチャー/ダキブチャー/赤瓦/アマダイガーラ/コンクリート瓦/コンクリート/トタン)	
<input type="checkbox"/>		出入り口	
<input type="checkbox"/>	台所	位置	
<input type="checkbox"/>		屋根の形状 (切妻型/入母屋型/方形型)	
<input type="checkbox"/>		屋根の材質 (カヤブチャー/ダキブチャー/赤瓦/アマダイガーラ)	
<input type="checkbox"/>	家畜小屋	位置	
<input type="checkbox"/>		高さ	
<input type="checkbox"/>		屋根の形状 (切妻型/入母屋型/方形型)	
<input type="checkbox"/>		屋根の材質 (カヤブチャー/ダキブチャー/赤瓦/アマダイガーラ)	
<input type="checkbox"/>	風呂	位置	
<input type="checkbox"/>		高さ	
<input type="checkbox"/>	フール	位置	
<input type="checkbox"/>		高さ	
<input type="checkbox"/>		材質 (切りだした石/土/野面積みの石)	
<input type="checkbox"/>		屋根の有無/形状 (切妻型/入母屋型/方形型)	
<input type="checkbox"/>		屋根の材質 (カヤブチャー/ダキブチャー/赤瓦/アマダイガーラ)	
<input type="checkbox"/>	ヒンブン	位置	
<input type="checkbox"/>		高さ/幅	
<input type="checkbox"/>		材質 (一枚岩/石積み (布積み/野面積み) /樹木 (種類:) /板)	
<input type="checkbox"/>	水タンク	位置	
<input type="checkbox"/>		形状	
<input type="checkbox"/>		高さ/幅	
<input type="checkbox"/>		材質 (コンクリート/切り石/焼き物)	
<input type="checkbox"/>	アタイ (菜園)	位置	
<input type="checkbox"/>	アシャギ外部	位置 (門から見た位置) /出入口	
<input type="checkbox"/>		屋根の形状 (切妻型/入母屋型/方形型)	
<input type="checkbox"/>		屋根の材質 (カヤブチャー/ダキブチャー/赤瓦/アマダイガーラ)	

【図 1】 質問項目一覧表

調査中の資料

調査中は、話者に聞き取りをしながら前述した屋号地図や当該地域の空中写真、戦前の古写真(家屋や屋敷囲いなどが写っているもの)を見ながら情報を書き込んでいく。

また、【図 2】のように話者から間取り図や景観に関する絵を提供していただくこともある。(調査時に使うものは基本的に屋号地図であり、それに情報を書き込んでいく。屋号や個人名などが多く書かれているため、話者からいただいた家屋の間取りや当時の公民館の詳細について紹介した。)



【図 2】話者から提供していただいた自宅の間取りなど

話者との現地調査

話者と共に、集落内の現地調査を行うこともある。事前に文化課で現地調査をした際に見つけた古い井戸や屋敷囲いの一部などを見てもらい、戦前から存在するかの確認や、景観(水田の範囲や戦時中に新設された道路など)の変遷について調査する。

また、話者の多くは戦前の住居と異なる場所に住んでいることが多かった。そのため、戦前に住んでいた敷地内に行き、家屋の配置や屋敷囲いの高さ、井戸やフル(豚便所)の位置などを教えていただいた。



【写真 2】話者との現地調査

委託事業者による 3D 撮影

事前に、住民や自治会に事業説明を行い、撮影許可を取り、調査地域に残る戦前の屋敷囲いやヒンプン、石畳、井戸などを 3D 撮影する。

撮影されたデータの一部は、成果品である「とみぐすくタイムマシン」⁶や 3D データの外部サイト「スケッチファブ」⁷内で見られることもできる。

ほとんどの調査地域で、住宅に一部残っている屋敷囲い(石垣)やヒンプン、石畳、石獅子などを撮影することが出来た。また、令和 7 年度の調査地域では、大正元年に建てられた瓦葺の家屋の撮影もすることができた。



【写真 3】業者による 3D 撮影の様子

2-3 調査後

調査後は聞き取りした内容をもとに、グラフィックデータを作成していく。また、エクセルなどに一軒ずつの詳細や集落内の景観情報をまとめる。

そして、完成したデータが納品されたあとは、調査内容と完成データに相違がないか確認し、話者の方にも確認していただく作業がある。

事業委託業者への提出データ(一部)

まず初めに事業委託業者へ提出するものは調査地域の屋号一覧と戸数、一軒ずつナンバリングした地図である。(戸数が多い場合は、エリアに分けてナンバリングしたこともあった)また空中写真や調査地域の戦前写真なども提出する。

調査が進むにつれて、各家の詳細情報を一覧化したデータや、【図 3】のような作図データなどがある。

話者との完成データの確認

完成データが納品された後、話者とともに家屋や屋敷囲い、敷地内の家屋や小屋などの配置間取りなどを一軒ずつ確認していく。

また、集落内の道路の色やクミイの大きさや深さ、色、雑草の生え具合、共同井戸やサターヤーなどの細かな景観についても確認する。

家財・民具などの確認

完成データの確認は、豊見城市歴史民俗資料展示室で行うことが多い。展示室は、簡易的な民家を展示しており、茅葺屋根、一番座・二番座・台所、そしてフル(豚便所)の一部を見ることができる。

そのため、展示室内にある茅葺屋根や内部を確認していただき、話者の家との相違を確認したり、民具や家財の有無についても聞き取りしたりしている。



【図 3】 作図データ



【写真 4】 話者と調査内容の確認



【写真 5】 話者と家財などの確認

2-4 成果品

成果品は「とみぐすくタイムマシン」や、豊見城市教育委員会作成の沖縄戦平和学習用 VR「時空記者」内のコンテンツに反映されている。

「とみぐすくタイムマシン」は、戦前の豊見城市内全域だけではなく、瀬長島や真玉橋、豊見城グスクといった要所も3D復元されている。

【写真 6】の中央にあるモニターに映っているのは戦前の瀬長集落の一部である。当時の集落は瀬長島の野球場の位置にあったが、戦後は島外に移動した。



【写真 6】展示室のモニター画面

「とみぐすくタイムマシン」では、戦前の集落と現在の集落を同時に閲覧できる。

また、集落内を散策することもできる。敷地内に入り、一軒ずつ住居内も詳細に確認できる。

一部の地域ではあるが、委託事業者によって 3D 撮影した現存している戦前からのヒンプンやシーサー、屋敷囲い(石垣)、五右衛門風呂も確認できる。【写真 7】は字真玉橋の戦前集落である。沖縄戦によって破壊された遺構の真玉橋と、家屋などが確認できる。

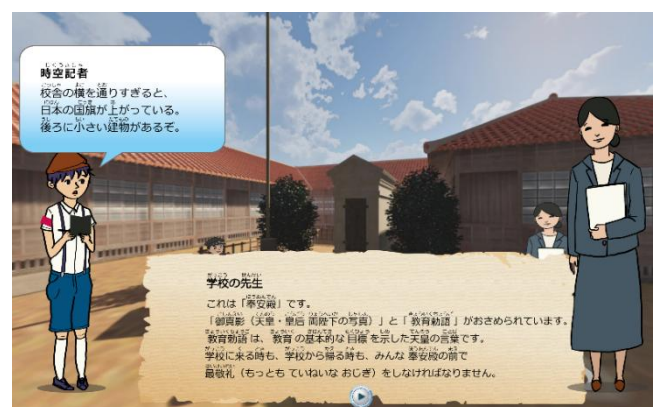


【写真 7】デジタル復元した真玉橋と真玉橋集落

「時空記者」は、令和7年7月に一般公開された豊見城市教育委員会作成の平和学習コンテンツである。

「時空記者」内のコンテンツでは、戦前から戦後の集落の様子が変わるようになっており、地域住民がどのように戦争に巻き込まれていったのかが分かる。

また、昨年度に聞き取りした豊見城第二国民学校も復元されており、児童・生徒に現在の学校との違いを見比べてもらうことができるため、より戦前のイメージができやすくなっている。



【写真 8】「時空記者」内で再現された戦前の豊見城第二国民学校

令和4年度からは、デジタル復元された集落や遺構などの成果品をもとにした歴史講演会や、沖縄戦 VR コンテンツ監修者による文化講演会を開催している⁸。また、調査地域で住民に向けた成果品の報告会も行った。

3、活用事例

令和7年4月に、豊見城市内の小中学校に沖縄戦平和学習用VR「時空記者」の供用が開始され、7月には市のウェブサイト一般公開された。その結果、今年度は豊見城市立長嶺小学校と伊良波小学校、豊崎中学校の平和学習で活用していただいた。

豊崎中学校では、電子黒板と生徒一人ひとりが持っているクロームブックを併用した。本コンテンツでは字真玉橋、瀬長、渡橋名という3つの集落を散策することができる。生徒はこの3地域に班分けされ、それぞれの地域内の戦前から戦後の様子を見たり、登場人物に聞き取りをしたりなどして散策をする。その後、同じ班内での意見交換・共有をし、他の2つの集落を散策した生徒同士で学習内容を教え合う。1年生から3年生までの各学年で実施し戦前から戦後までの各時代を迫体験してもらうことができた。

長嶺小学校でも同様に、電子黒板とクロームブックを併用して取り組み、6学年でクラスごとに実施した。

また、豊見城市立中央図書館1階にある豊見城市歴史民俗資料展示室でも閲覧・操作することができるため、来館者や市内の学童クラブの子ども達、県外の修学旅行生にも利用していただいた。



【写真9】豊崎中学校での平和学習



【写真10】長嶺小学校での平和学習

4、今後の課題

現在までに、6地域と2校の聞き取り調査をし、いずれの調査でも戦前生まれの方にお話しを聞くことが出来た。また、話者が他の方を紹介して下さることもあり、最終的には10名ほどからお話を聞くことができた地域もある。しかし、地域によって話者の人数や年齢も様々で情報量にも差がある。お話を聞くことが出来るうちにより多くの情報を得ていきたい。

「時空記者」は、いつでも・どこでも・誰でも操作ができ、平和学習の導入としても適している。戦前集落を表示しながら、同時に写真資料や説明も見ることができるため、一度に多くの情報を得ることが出来る。また、集落内の気になるスポットを自由に散策できるので、没入感の高い体験ができる。そのため、より戦前集落やその時代をイメージしやすくするために、集落環境や風景、住民のエピソードや収集をさらにすすめていきたい。

調査が進む中、話者からの情報提供で、戦前からある樹木や屋敷囲いの石垣がほぼ完全な状態で現存していることが分かった地域がある。しかし、樹木も石垣も、その年の台風で倒壊・損壊し、樹木に関しては伐採されてしまった。どの調査地域でも、樹木や屋敷囲い、井戸などの一部が戦前から現存しており、このような戦前からの風景の一部を住民に伝え、地域で大切にさせていただくために、調査内容を地域に還元していきたい。

おわりに

ここまで、デジタル博物館事業の一つである、「戦前集落の 3D 復元作業」についておおまかに振り返った。本調査では、戦前集落の日常風景だけではなく、話者の幼少期から現在までの半生を聞くことが出来た。今回の調査では、戦前に国民学校へ上がる前の方、国民学校へ通っていた方、他県へ疎開した方、中学生だった方、成人していた方など幅広い年代の方からお話を聞くことが出来た。那覇港まで見渡せる景勝地近隣に住んでいた方には、1944 年 10 月 10 日の空襲を長い時間眺め、黒い煙が自宅近くまで来ていたことなどを教えていただき、その他にも多くの方から戦中のお話を聞くことが出来た。一緒に同席していただいたご家族も初めて聞く内容も多かったようで、今後は地域の方へも伝えていくために、戦前生まれの方と戦後生まれの方が交流できる場をもちたいと考えている。

令和 7 年度までに、6 地域と当時の豊見城村にあった 2 校の聞き取り調査を終え、いずれの地域も戦前生まれの方にお話を聞くことが出来た。約半年間、ほぼ毎週のように聞き取り調査にご協力いただき、感謝の思いでいっぱいである。また、ご本人だけではなく、ご家族や自治会の方にも感謝を申し上げたい。

今後、戦前生まれの方にお話を聞くことが困難な地域もあるだろう。少しでも多くの方にお話を聞き、戦前の集落復元を地域の住民に見てもらうことで、沖縄戦で破壊されたものや失われたものを想像し、地域の歩んできた歴史や出来事をみていただきたい。戦前生まれの方の記憶や体験を風化させず、次世代に形あるものとして継承し、多くの住民に地域への理解と愛着が増してもらえるような事業にしていきたい。

-
- ¹ 島袋幸司 2022「豊見城市のデジタルアーカイブ作成—基礎自治体単位のデジタルアーカイブ作成実践記録—」『豊見城市教区委員会文化課 紀要 まだま 第2号』
 - ² 豊見城市内に戦前からある集落は字豊見城、宜保、我那覇、名嘉地、田頭、瀬長、与根、伊良波、座安、渡橋名、上田、渡嘉敷、翁長、保栄茂、高嶺、平良、高安、饒波、金良、長堂、嘉数、真玉橋、根差部である。令和 4 年度は字瀬長と真玉橋、令和5年度は字豊見城と嘉数、令和6年度は字渡橋名と豊見城第二国民学校（現在の豊見城市立座安小学校）そして令和7年度は字長堂と豊見城第一国民学校（現在の豊見城市立長嶺小学校）の聞き取り調査を実施した。
 - ³ 3D データを平和教育向けに活用するために制作された。平和学習の教材としても活用できることを想定し、令和5年度から沖縄戦や平和教育の専門家の方と検討がすすめられ、令和7年度に一般公開された。
<https://www.city.tomigusuku.lg.jp/soshiki/8/1035/gyomuannai/3/TGDA/8661.html>
 - ⁴ 豊見城村教育委員会文化課 2001『豊見城村史 第6巻 戦争編』豊見城村役所
 - ⁵ 豊見城市教育委員会文化課 2008『豊見城市史 第2巻 民俗編』豊見城市役所
 - ⁶ 戦前の豊見城村を知るには、現存している写真などの資料では限りがあり、当時を生きていた方の記憶が頼りである。その記憶を頼りに戦前の豊見城村の姿を残すことで、戦争で失われたものを考えるきっかけや、現存している史跡や文化財を見るなど、学習や探訪、観光のきっかけとなるコンテンツとして作成された。
 - ⁷ <https://sketchfab.com/TGDA>
 - ⁸ 令和4年度「デジタルでよみがえる真玉橋とその歴史—最新テクノロジーで復活を遂げる いにしへの真玉橋—」（上里隆史先生）、令和5年度「デジタルでよみがえる豊見城グスクと石火矢橋」（上里隆史先生、山本正昭先生）、令和6年度「沖縄戦 VR で平和を考える：平和学習の可能性を探るデジタルアプローチ」（北上田源先生、喜納大作先生、狩俣日姫先生）、令和7年度「戦後80年の平和教育—デジタル教材と取り組みの共有」（北上田源先生、狩俣日姫先生）